

宋代における刊刻の展開

尾崎 康

序 唐五代の刊書

印刷術は、市民の生活の中で、拓本などの経験に基いて、ふとしたきっかけで創案されたもので、いつ、だれが發明したかは特定できるものではない。しかし数ある印刷術起源説のうちで、印刷についての最古の記録として、神田喜一郎氏の初唐説がもっとも信頼できるものである。

すなわち唐の三蔵（六四三〜七二二）の『華嚴五教章』（六七七ころ成立）、『華嚴經探玄記』（六九〇ころ成立）に「如世間印法」とあることから、七世紀後期には印刷はかなり普及していたという¹⁰。

唐代に印行されたものは、文献と遺品に見る限りでは仏教の圖像と經典・曆・字書および「陰陽雜説・占夢・相宅九官五緯之流」（唐柳 『家訓』）の類であつた。

図書の刊刻は、五代の間の馮道による監本『九經』（『五代會要』卷八）、蜀の・丘喬による『文選』・『初学

記』・『白氏六帖』（宋史卷四七九・守素伝）をもって嚆矢とする。そして宋代に入って、ようやく本格的な図書出版が開始された。

一 北宋代の刊刻

（一） 宋初の開版

太宗初期、『太平広記』（太平興国六年・九八一）、『太平御覧』等の宋朝四大部書が完成とともに開版されたといわれるが、当時は経史の主要な諸書も未刊で、巨冊の類書がいきなり刊刻されたものか、必ずしも明確ではない。ごく一部ながら現存本があつて北宋初刊と確認できるのは、同二年（九七七）に完了したとされる『開宝蔵』（蜀版大蔵経）¹⁾ 六六二〇余巻である。

統一を達成した宋王朝は、文治主義を標榜し、科挙制度を整備推進して、そのテキストとしての経史の諸書を厳密に校訂して定本を作りあげ、ようやく発達を遂げた木版印刷術をもって公刊しようとした。『宋会要』（輯稿第五五冊）崇儒四勸書・『玉海』卷四三藝文・『麟台故事』卷二校讎の記事によれば、この事業は端拱元年（九八八）からはぼ一〇年かけた。『五経正義』に始り、淳化五年（九九四）からの『三史』が続いた。一一世紀中には、四部の主要な書の多くが開版されたものと思われる。この宋初の一連の大事業については、私は既に略述した²⁾。

同じころ宿白氏は、『宋会要』にしても崇儒のほかにも職官（第六八冊）・国子監（第七五冊）・刑法（第一六

四冊)等の巻や、『玉海』の他の巻、『続資治通鑑長編』、『宋史』、『宋朝事實類苑』、『直齋書錄解題』、さらには宋元明刊本の序跋や、それに附刻された開版のときの上表文、中書劄子、進呈鏤板の列銜などを博搜して、文獻上に見える太祖以来の北宋歴代の刊本を網羅、列挙されている(3)。

これら新しく大規模な刊刻事業は、北宋朝が行った多くの文化的な事業の中でも、とりわけ意義の大きなものであった。科挙出身の優秀な少壮官僚を動員して、四部の古籍から適書を選び、その良質の写本を基に更に校訂に厳密を期し、王朝の權威をかけて、後世まで批判に堪えうる定本を作りあげようとしたものと思われる。いま日本に伝存する唐鈔本および唐鈔本系の諸本と校勘すると、それに較べて多少の問題のあることは認めざるをえないが、一般的に言えば非常に優れたテクストが作られたとみることができであろう。

しかしこの後、変化に富む写本はほとんど散逸し、対校すべき資料が亡佚したために、明清時代の翻刻本の質がいよいよ劣ることになってしまった。すなわち後代の刊本はこの權威づけられた定本を覆刻し、翻刻を繰返しつつ、現在の通行本に至ったとして過言ではあるまい。その間に誤字誤脱、刪略竄入の類の増加は常に避けられないから、結局、宋元版、とくにその古い版本ほどテクストとして尊重されることになるわけである。ただし、權威ある校訂というものが、当時(宋人)の思想や学説、さらにはその時代人の感覚に基いて行われたために、先秦から唐代に至る原著の字句が不本意に改められた例の少くないことが、日本に伝存の唐鈔本系の諸本から指摘されている。

(二) 現存北宋版

北宋版の今に伝わるものはきわめて少く、ようやく十指に余る程度しかない。それも大半が、高麗・朝鮮を経て日本に伝った本である。それというのも靖康初(一一二六)、金が宋の首都開封を陥れた際に、書籍・版木の種類を悉く北に持ち去ったからであろう。『三朝北盟会編』巻九八所引の趙子砥『燕雲録』に

靖康丙午冬、金既破京都、当时下鴻臚寺取經板一千七百片。是時子砥実為寺丞、兼是宗室、使之管押、随從北行。丁未五月、至燕山府。

とあり、また『靖康要録』巻一五に、

靖康二年二月二日、壞司天台渾儀、^{④6}軍前。虜凶明堂九鼎、觀之不取。止索三館文籍圖書・図子書板。

とあることはよく知られている。さらに『資治通鑑』の版木については、建炎三年(一一二九)に杭州が攻略された際に奪い去られたという(『金史』巻八〇赤蓋暉伝)。

日本に伝存する北宋版について、私は一九八四年に台北で開かれた 古籍鑑定與維護研討会 で 宋版鑑定法の題で発表した際に、北宋版の実例としてその書影とともに紹介した⁽⁴⁾。その後北宋版と審定することができた数本を加えて、ここに再録しておく。

新雕入篆説文正字	(建中靖国元年・一一〇一・高麗国蔵印)	一冊	お茶の水図書館蔵
姓解	三卷 (同右)	(影刻本)	古逸叢書 三冊 国会図書館蔵
通典	二〇〇卷(欠三卷・有補写)(同右)	(影印本)	四四冊 宮内庁書陵部蔵【図1】

- 重広会史 一〇〇巻 (同右) (影印本) 二〇冊 尊経閣文庫蔵
- 中説 一〇巻 (同右) 二冊 宮内庁書陵部蔵
- 孝経(御注) (通字欠筆) (影印本) 一冊 宮内庁書陵部蔵
- 文選 存一巻 (同右) 四冊 故宮博物院北平蔵
- 文選 存二巻 (同右) 二冊 故宮博物院北平蔵
- 文選 存二二巻 (同右) 一四冊 北京図書館蔵
- 史記 存卷五〇七(南宋初期建刊本一三〇巻補配巻) 一冊 北京大學図書館蔵
- 史記 存六九巻 一一冊 杏雨書屋蔵
- 范文正文集 二〇巻(巻一抄配) (影印本) 古逸叢書三編 九冊 北京図書館蔵
- 新雕雙金 熙寧二年(一〇六九)刊 一冊 眞福寺蔵
- (火珠林)(紹聖新添周易神 曆等残巻) (紹聖 一〇九四丁七) 一巻 眞福寺蔵
- 白氏六帖事類集 三〇巻 一二冊 静嘉堂文庫蔵
- 「建中靖国元年・一一〇一・高麗国蔵印」とある四書については、『北宋版通典』⁽⁵⁾別巻所収の解題『通典北宋版および諸版本について』に詳述したが、巻尾に「高麗国十四葉辛巳歳ノ蔵書大宋建中靖国ノ元年大遼乾統元年」という朱文長方印が捺されていて、建中靖国元年に高麗王府に在ったことが明らかである。文中の「建」字は高麗の太祖王建を避諱して欠画する。『中説』にはこの印がないが、上の四書と同じ李氏朝鮮世宗一一年(一四二九)の「経筵」印を捺すから、いずれも豊臣秀吉の朝鮮出兵(壬辰倭乱・一五九二)の際に強引に日本に齎

されたものであろう。『通典』には補刻葉がかなり含まれているから、一一世紀中葉に刊刻され、その後期に補修・印行された本となる。

「通」字欠筆」は仁宗代初期の天聖明道間（一〇二一～一〇三三）の明肅皇太后の父の劉通の執政中に避諱されたものである。『文選』は二〇〇一年春に故宮本を、その初秋から二度にわたって北京本を精査する機会を得たばかりであるが、「通」字については欠画しない場合の方が多いものの、故宮本では三回（うち一回は「涌」字を誤る）、北京本では大量に（五〇例以上）、明らかに欠画している。

北京大学図書館の『史記』は、南宋初期建刊本一三〇巻二〇冊の第二冊の一部に補配された三巻で、一四行二七字の小字本、避諱欠筆は仁宗の嫌名の「懲」字に止まる。

『范文正公文集』は呉郡の范（仲淹）家に伝えられた由緒ある本といわれ、蘇軾の元祐四年（一〇八九）の序からさほど時を隔てないころの刊本であると思われる。

北宋版がテキストとして優れていることは、『通典』には多くの実例があつて明らかであるが、『宋会要』等の記事に厳密な校訂の経過を見るだけでなく、北宋版の本文を現在の通行本と対校して証明する作業がまだ十分に行われたとはいえない。右に繰返し現存北宋版の書目を揚げたのは、経学・文学の専門家にそれを期待するからである。『史記』については近年、北京大学の張玉春氏が詳しく校合されたはずであるが、その著に挙例が少く、校勘の結果が納得させられるに至っていない⁶⁾。

北宋版はまだ発見されずに埋れている可能性もあるのではないかと思われるが、もはや刊記のある本はありえないだろうから、その字様（字体）によって判断しなければならぬ。そのために北宋版の典型的な字様を、仏

教の經典からも確認しておきたいと思う。東禪寺版、開元寺版、思溪版以前の刊年をほぼ明らかにする刊経は、おおよそ次表の通りである⁷⁾。この中で明道二年(一〇三三)刊の『大慈心陀羅尼經』は、二〇〇〇年に浙江省博物館で見たが、『御注孝經』等とよく似た北宋の典型的な字様をしている。歐陽詢や劉公権の楷書体を採用したといわれる、端麗で柔媚な字様である。

北宋刊経

開宝四〜太平興国二(九七二〜七) 開宝蔵

開宝五(九七二) 熾盛光仏頂大威徳銷災吉祥陀羅尼經

奈良上之坊蔵

雍熙二(九八五) 金剛般若波羅密經

京都清涼寺蔵

端拱一(九八八) 金光明經

? 金剛般若波羅密經

江蘇江陰県(文物八二一一二)

大中祥符六(一〇一三) 墨書 仏説觀世音經

明道二(一〇三三) 大慈心陀羅尼經

瑞安県 (文物七三一)

慶曆二(一〇四二) 晏家刊 法華經

嘉祐五(一〇六〇) 杭州銭家刊 法華經

八(一〇六三) 同 重校刊 法華經

山東 県(文物八二一一二)

熙寧一(一〇六八) 同 法華經

二(一〇六九) ? 法華經

二 南宋版

(一) 北宋版の覆刻 南宋初期官刻本

上掲の北宋版のうち、『通典』と『史記』には南宋初期、すなわち紹興前半ごろの覆刻本も現存する。いずれも刊記がないが、『通典』（存一七四卷三六冊 天理図書館蔵）の覆刻は、刻工名から紹興一〇年（一一四〇）前後に行われたことを、既に表示しつつ説明した⁸⁹。『史記』（存一〇二卷 二八卷は別版を補配 北京図書館蔵⁹⁰）の覆刻本には原刻の刻工名が見当たらないが、版面の状況は『通典』の北宋原刊と南宋初覆刻との関係とまったく同様と見られる。すなわち、南宋初に北宋版を覆刻することが少くなかったことを示唆している。

北宋の官刻本の版木の多くは、首都の開封の国子監に保管され、必要に応じて印行し、また補刻もされていたようである。しかし、前述したように、靖康の変で国子監の版木は金に持ち去られ、諸官僚の蔵書も同様の憂目にあつたことであろう。その中で『資治通鑑』の版木は、元祐元年（一〇八六）に新雕されて以来、杭州に留め置かれていたらしいが、『金史』卷八〇赤蓋暉伝に「遂至餘杭。通糧餉、治橋道、暉之力為多、乃還、載資治通鑑版以歸。」とあるように、金は建炎三年（一一二九）に杭州に攻め込んだときに、執拗にもこれまで奪い去つたのである。

江南の地に宋王朝が再建され、官僚機構が再編されるとなると、当然、經史の書籍の刊刻が急務とされる。し

かしその版本はほとんどなく、新たに校訂出版するには多大の労力と時間を要するはずである。ところが、王国維の『兩浙古刊本考』や葉德輝の『書林清話』巻三等には、伝世した南宋初期刊本の書名が多数列挙されているが、その数の多さには驚かされるほどである。紹興年間の前半ぐらいついでに、杭州圏の官衙で刊刻されたことが明らかで、影印本や図録等でその書影を見ることのできる本の書名を一覧表にすると、次の如くなる。

紹興前半期浙刊有刊記本（覆北宋版の可能性大）

	臨安府	刊年	所蔵者	図版所在
文粹	一〇〇卷	紹興九年	北京	図九
漢官儀	三卷	紹興九年	北京	続古逸 図七
群經音辨	七卷	紹興九年	北京	【図2】
西漢文類	三五卷	紹興一〇年	北京他	
紹興府				
毛詩正義	四〇卷	紹興九年	杏雨	影印
兩浙東路茶塩司				
資治通鑑	二九四卷	紹興三年	北京	百衲 図七四
資治通鑑目錄	三〇卷	同	北京・中央他	四部

資治通鑑考異	三〇卷	同	北京他		
旧唐書	二〇〇卷	紹興	北京	百衲	図七三
外台秘要方	四〇卷	紹興	静嘉堂・北京他		図七五
事類賦	三〇卷	紹興	北京		図七七
両浙西路茶塩司					
臨川先生文集	一〇〇卷	紹興二二年	中央・北京		
荊湖北路安撫司					
建康実録	二〇卷	紹興一八年	北京	古逸	図二一五
温州州学					
大唐六典	三〇卷	紹興四年	北京・南京・北京大	古逸	図一〇四
湖州(無刊記)					
新唐書	二二五卷	紹興七年ころ	静嘉堂他	百衲	図六六
五代史記	七四卷	紹興七年ころ	中央	中央図録	
州州学					
古三墳書	三卷	紹興一七年	北京		図八六
建康郡斎					
花間集	一〇卷	紹興一八年	南京	影印	図一〇五

明州

文選（六臣注） 六〇卷

紹興二八修

足利他

影印 図八一

徐公文集 三〇卷

紹興一九年

大倉

黄州

王黄州小畜集 三〇卷

紹興一七年

北京

四部

所蔵者略号

図版略号

北京 中国国家図書館（北京）

図（数字） 中国版刻図録（図版番号）

杏雨 武田科学振興財団杏雨書屋

続古逸 続古逸叢書

静嘉堂 静嘉堂文庫（東京）

百衲 百衲本二十四史

中央 国家図書館（台北）

中央図録 中央図書館宋本図録

南京 南京図書館（南京）

四部 四部叢刊

北京大 北京大学図書館（北京）

古逸 古逸叢書三編

足利 足利学校遺蹟図書館（足利）

図釈 宋元版刻図釈一

大倉 大倉集古館（東京）

影印 単行の影印本

以上に表示したのは、ほぼ刊記を有し、それによってだいたい紹興前半に、杭州圏（両浙東路・両浙西路・江

南東路等)の臨安・紹興の両府や各州郡で刊行されたことが明らかかな本である。現存本でこれだけあるが、他に無刊記ながら版式や刻工名が共通する本もあり、さらには亡佚した本がおそらくそれに数倍する量になるであろう。南渡の直後の困難な時期に、短期間の内に、いかに出版が急がれたかを窺い知ることができる。

しかもこれら南宋初期刊本は、版式が優れていて文字も美しく、テクストとしてもかなり良質のように思われる。すなわちこの一連の刊刻には、本文を校訂して版下を作ることから始まって、雕版に至るまで、多大な労力と時間を要するはずであるのに、それがなぜ可能となったのか。

『建炎以来朝野雜記』卷四監本書籍の條に、

監本書籍者、紹興末年所刊也。國家艱難以來、固未暇。及九年九月、張彥実待制為尚書郎、始請下諸道州學、取旧監本書籍、鏤板頒行、從之。

と、『玉海』卷四三藝文にも、

紹興九年九月七日、詔下州郡國子監元領善本、校對鏤板。

とあり、また上掲の表中の『文粹』の巻末の臨安府紹興九年正月の刊記のうちに、「今重行開雕」という。すなわち紹興九年の前後には、江南にあった國子監本を底本として、州郡・州学がこれを覆刻したと考えられるのである。そして南宋の監本は、その末年になってようやく誕生したということである。覆刻であれば本文校訂の労力が省かれ、しかもその底本が厳密な校訂を経た北宋の監本であれば、テクストとしても良質でありうる。また杭州の附近には優秀な刻工が多数いて、北宋の監本の多くを雕り、北宋末からは湖州思溪円覚禅院の大蔵經の刻に携わり、一部は福州の『東禅寺万寿大蔵』や『開元寺³³盧大蔵』の雕蔵も応援していたから、國家艱難の

際にも、これら江浙の刻工を動員して、短期間に多数の書籍を覆刻することができたのであろう。『思溪版』はおそらく紹興二年に全蔵五五〇〇余巻を完雕し、その残余の木材を用いて『新唐書』と『五代史記』が、宇文時中の知湖州在任中（紹興六年八月〜八年正月）中に刊刻された¹⁰。『開元寺版』には紹興五年から一七年までの刊記（題記）を有する経巻がごく少く、この間はほとんど中断していたかに思われる。これらがこの覆刻の最盛期と一致しているのは、偶然の符合ではあるまい。上掲の「紹興前半期浙刊本」は、ほぼ同一の範囲の時期、地域に刊刻されたものであるから、その原刻刻工（巻中に南宋前期以降の補刻葉を含む本が少くないから区別の要がある）は、当然、相互に共通しあう。『中国版刻図録』の解説によれば、「南宋初葉杭州地区良工」である。そしてその多くが、『通典』覆刻本とも共通する刻工であり、字様もたいへんよく似ている。

覆刻本の字様は、当然のことながら北宋の原刊本と酷似するが、『通典』と『史記』について直接較べてみると、文字の特徴は同じでも、形が微妙に相違する。北宋版には一画一画のわずかな丸み、ふくらみ、柔かみがあるが、南宋版ではそれがやや直線的になり、粗い感じがする反面、力強さが見られる。つまり、^④写する形で版下を抄写するとき、また覆刻の彫刀を下したときに、もとのゆるい曲線がとかく鋭角になってしまったのである。北宋版の優美、温潤に対し、覆刻本には刀法の故にむしる素朴で、稚氣愛すべきものを感じる。

このように覆刻の場合に原刊から字様がどのように変わるか、版面・字面を較べて見ると理解できる。原本、あるいは影印本や書影を見ると、表の「紹興前半期浙刊本」は、みなこのような特徴を持っている。これら南宋初の官刻本が北宋監本の覆刻本であるとみて、ほぼ誤りがなからうと私は考える。

(二) 南宋国子監本の開版

南宋国子監では、「国家艱難以来、固未暇」、ようやく「監本書籍者、紹興末年所刊」であった（前引『建炎以来朝野雜記』）。つまり、北宋版の覆刻で急を凌いでいた時代が終わり、紹興後半以降、臨安の国子監で校訂を行って出版できるようになったと思われる。ただし、その費用は引続いて杭州周辺の茶塩司や転運司が負担することが多かったようである。

今、それと明瞭にわかる本はないが、現存本から推測するに、両淮江東転運司刊三史（『史記』、『漢書』、『後漢書』）、衢州刊『三國志』、杭州刊 南北朝七史（所謂 眉山七史）などがそれに該当するかと考えられる。

両淮江東転運司刊三史 は、従来、蜀大字本といわれてきた九行一六字本で、北京図書館蔵の『史記』（劉氏嘉業堂旧蔵 影刻本）に、「左迪功郎充無為軍学教授潘巨校对ノ右承直郎淮南路転運司幹辦公事石蒙正監雕」の二行の官銜がある。また同時代の洪邁の『容齋隨筆』巻一四に、

紹興中、分命両淮江東転運司刻三史板。其両漢書内、凡欽宗諱並小書四字、曰淵聖御名。

とある通り、両漢書 に欽宗の諱の「桓」を「淵聖ノ御名」と、次の高宗の「構」を「今上ノ御名」とする例がしばしばある。その『漢書』は首尾完好本がないが、故宮博物院（北平）等に残本が八部あり、『後漢書』は完本を含めて、北京図書館・故宮博物院（北平）に六部存する。紹興中刊の「両淮江東転運司刻三史板」であることが明らかである。

ところが文中には未画を欠いた「桓」「構」字も少からずあり、それらはすべて「淵聖御名」「今上御名」とあったものを削って、後に入木して改めた跡が明瞭に見てとれる。更に次の孝宗の嫌名の「慎」字を欠画する場

合が多数ある。このことは三史が刊刻されてまもなく、紹興三一年欽宗が北地で逝き、翌年高宗が讓位したために、この三字が改刻されたことを示すものと思われる。すなわち紹興未刊、次の隆興・乾道初の修本ということである。

三史の文字は、大字本であるだけに堂々として、南宋初期の覆刻本の字様を完全に脱している。とりわけ『史記』には顔真卿の書風が見られ、とくに上海図書館蔵の原刻本にそれが顕著である。

南北朝七史 はそれよりやや遅れて刊行されたらしく、「慎」字が当初から欠画されている。この期の官刻本は概して避諱欠筆が厳しく、北宋版の覆刻本が欠画も原刊本のを踏襲していることが比較的多いのと異なる。

以上のことを念頭において『中国版刻図録』を見ると、『礼記注』(図版一三)、『龍龕手鑑』(同一四)、『大宋重修広韻』(同一五・一六)などがこの系列に属すると思われる。特に『武経亀鑑』(同一五)【図3】は隆興二年(一一六四)に孝宗が刊序を書いた本であるから、まさにその典型である。

この系統の刊本は孝宗の淳熙年間(一一八九)いっぱいごろまでみられ、字様・版式・欠画、そして本文などを総合して、版本学上、この時期までを南宋前期と称するのが良いと思う。

南宋国子監を代表する本が、前期の終りから中期にかけて出版された 越刊八行本注疏 であると、私は考える。紹興初の北宋版の覆刻に援助を惜しまなかった両浙東路茶塩司が再び中心となつて、『周易注疏』(『中国版刻図録』図版六八)、『尚書正義』(同六九)、『周礼疏』(同七〇)、『礼記正義』(同七一・七二)、『毛詩注疏』、『春秋左伝正義』、『論語註疏解経』、『孟子註疏解経』等を、八行・一五〜一九字で刊刻したものである。『礼記正義』に紹熙三年(一一九二)の三山黄唐の刊記があり、『詩』『礼』はその前年に、『易』『書』『周礼』はさらに

それ以前に刊行され、『左伝』は慶元六年（一一二〇）に紹興府が、『論語』『孟子』はそれ以後に刊行された（11）。それまで単疏本しかなかったこれら経書類を経注合刻とし、はじめて注疏本が出版されたものである。その編輯・校訂の過程では相当な努力が払われたことであろうし、国子監が従来の形式にとどまらないで、新しい注疏本を採用したことに注目すべきである。

八行本という大きめの字様は温雅で美しく、南宋前期から中期にかけての典型を示している。

現存本の多くは補刻葉を含むから、当時かなり多量に刷られたと思われるものの、実際に現存する本は少い。足利学校遺蹟図書館蔵の『周易注疏』一三卷（陸子 手識本）、『尚書正義』二〇卷、『礼記正義』七〇卷は上杉憲実が永享一一年（一一三九）に寄進した本で、国宝に指定されている。『中国版刻図録』所掲本は北京図書館に、『論語註疏解経』と、『孟子註疏解経』は台北の故宮博物院に蔵される。

（三） 南宋前期坊刻本

民間の書肆による出版は、南宋初期の臨安では早くから行われていたようであるが、刊記を残す本は少い。『中国版刻図録』所掲の『文選』（五臣注）存二卷（巻二九 北京大学図書館蔵・巻三〇 北京図書館蔵）と、『抱朴子』一八卷（北京図書館）が現存するぐらいであろう。『文選』には

杭州猫兒橋河東岸開牋紙馬鋪鍾家印行

の刊記があり、「杭州」とは建炎三年（一一二九）に臨安府と称する前の刻であることを示すと推定されている。字様は紹興前半に官刻された覆北宋版とまったく変らない。『抱朴子』には

旧東京大相国寺東栄六郎家見寄／居臨安府中瓦南街東開印輸經史書／籍鋪今将京師日本抱朴子内篇校正／刊行的無一字差訛請四方収書好事／君子幸賜藻鑒紹興壬申歲六月旦日
の刊語がある。壬申は二二年である。

地方ではやはりかねてからの伝統があり、戦乱の地から遠く離れた福州建安と蜀眉山が中心であった。

福州では北宋後期（元豊三丁政和二年・一〇八〇～一一二二）に『東禅寺万寿大蔵』六三三九巻が完成し（追彫がある）、引続いて『開元寺³³廬大蔵』六一一七巻を刊刻していた。この地は木材が豊富で、多数の名工が集結し、また外部から発注もできる態勢が形成されていたことであろう。とりわけ建安は福州でも内陸にあるが、それだけ梨材を主とする用材に恵まれ、紹興中から細く右上りの独特の字様の刊本を多数残している。

まず、武田科学振興財団杏雨書屋蔵の『史記』に、紹興一〇年（一一四〇）邵武東郷朱中奉宅刊の木記がある。匡郭が一七・四×一一・七糧というやや小型の本である。宮内庁書陵部蔵の『初学記』も、字様・版式とも非常によく似た本で、後半になると字様が甚しく崩れて行くところまで共通するが、木記に紹興一七年の刊年とともに、刊者を「東陽崇川余四十三郎印宅」とする。浙江人の刊と明記されているわけであるが、次掲の錢塘王叔辺刊の『後漢書』は、武夷の呉驥が校正していて、浙人が建陽で書肆を開業していたという（『楹書隅録』）のも同じ例であろう。

紹興年間を過ぎたころの南宋前期後半の建刊本は、いっそう独自の字様を形づくる。これを『中国版刻図録』の解説は、「書体秀媚、字近瘦金体、遒勁有力」「紙墨版式、純係南宋初葉建本風格」と繰返し述べる。同図録で

は、これが図版一五九の『周易注』から同一六六まで、『後漢書注』(王叔邊刊)【図5】、『史記集解索隱』(乾道七年蔡夢弼東塾刊)、『史記集解』(北京大學圖書館藏)、『晉書』、『唐書』(南京圖書館藏)と続くのである。

私はこれらの大半を実際に調査したが、すべて紹興(初期)の建刊本より前期建刊本の方が匡郭がやや大きく、縦が一八〜一九糎となり、行格も半葉一三〜一四行以上、行二四〜二五字となっている。徽宗の「瘦金体」と言い切ることができるかはともかく、その感はある。「遒勁有力」とは思えず、それはむしろ次の中期建刊本に対しての表現になるうが、全体に輕妙で、やや右上がりの美しい字は、「秀媚」「娟秀」と言つて適しいかと思われる。ただし、一書の後半になると、字が粗雜に離られる傾向がある。京都大學人文科學研究所にも『後漢書』がある。

以上のように現存本から見るところでは、この南宋前期建刊本の大半が正史であることが、当時の建安の出版の傾向を示すものであるうか。中期からは附刻される注に特色が加わるようになるが、『史記』に索隱本が出現した以外、この時期では三史ともまだ従来の注と異なるものではない。本文の校勘にはさほど着手していないが、一見したところでは、あまりすぐれたテキストということではできないと思われる。

(四) 南宋中期建刊増注本

『史記』は唐初の写本以来、本文に裴 の集解を小字雙行の注で挿む形式が定着し、北宋・南宋前期を通じて、集解本の形で刊行され、現存本が少くとも一〇種以上も存在する。ところが建刊本がその字様を前期から中期のものに変えて行く過程で、建安の書肆から司馬貞の索隱を加えた二注本が現れた。

それは乾道七年（一一一七）蔡夢弼東塾刊本で、『中国版刻図録』図版一六一・三）、書中の巻尾の計一二箇所
に六種の刊記があるが、その代表的なものを示せば、次の通りである。

建谿蔡夢弼溥郷親校梓於東塾時歲乾道七月春王正月上日書（三皇本紀）

それから五年後の淳熙三年（一一七六）に、桐川郡齋（広徳県）から同じ二注合刻の官刻本が出版された（同
図録一二九・一三〇）。二注本は蒙古中統二年（一二二一）刊本を除くとこの二種だけが存し、しかも現存本が
共に各三部と少く、どうも三注本への繋ぎにすぎなかつたらしい。すなわちこのあと一五年して、やはり建安で
黄善夫が三注本を出し、以後、『史記』といえは三注合刻本が常識となつてしまつたのである。

このように南宋前期から、附注本・増注本が出現し始め、中期に至つてこれが全盛となるが、その多くは坊刻
本である。民間の書肆が営利を狙つて、新奇な形式・内容の出版に手をつけ始めたものであろう。

南宋中期建安刊の増注本の典型は、劉氏一經堂の『附積音註疏』と黄善夫之敬室『三史』である。この期の建
刊本は、まずその独特の字様に特徴があつて、『附積音註疏』本も『三史』も、この字様で刊刻された。

その字様とは初期建刊本から展開したものであるが、その「秀媚」というものから、「有一種横軽直重者、謂
之為宋字」（『書林清話』）といわれる面がさらに強調されて、「稜角峭厲」といわれるように右肩上りの鋭い字型
に変化したものである。

註疏本をさらに「附積音」としたのは、建安劉叔剛一經堂刊本からであると思われる。これは、足利学校遺蹟
図書館に『附積音毛詩註疏』二〇巻と『附積音春秋左伝註疏』六〇巻（北京図書館に存二九巻）が現存するだけ

で、果して 五経、あるいは 九経 が叢刻されたかどうか、詳細はわからない。

附釈音註疏 本は元の泰定（一一三〇～二七）ごろに、この二経の明らかかな覆刻も含めて、十三経 が刊刻されたらしい。静嘉堂文庫蔵の長澤規矩也氏の所謂 正徳十行本十三経註疏^{（12）}を見ると、いずれも元刊本で、明正徳の修葉を含みながら、字様には南宋中期の風が色濃く残っている。すなわち、南宋中期建刊本の覆刻の可能性が見えるのである。静嘉堂に『附釈音毛詩註疏』、『附釈音周礼註疏』、『儀礼図・儀礼旁通図・儀礼』、『附釈音礼記註疏』、『附釈音春秋左伝註疏』、『監本附音春秋公羊註疏』、『監本附音春秋穀梁註疏』、『論語註疏解経』、『孟子註疏解経』の十一経がある。このすべてが覆刻本であり、その原刊の南宋中期刊本がすべて存在した、とは断言できないが、八行本註疏 と同じく、すくなくとも『易』、『附釈音』の三字を冠する五経、あるいはそれに『論・孟』を加えた計八経は、この期に建安の書肆によって新たな註疏本として叢刻されていた公算が高いのではないか。

前後して、同じ建安の黄善夫が代表する家塾之敬室が、『史記』、『漢書』、『後漢書』を刊行した。両漢書の刊序によって、紹熙末から慶元四年まで（一一九四～九八）のことと思われる。『史記』に初めて唐張守節正義が加えられて、三注合刻本が誕生した。『漢書』と『後漢書』には、顔師古や章懐太子李賢の注の後に、しばしば「劉 曰」のように「三劉刊誤」、もしくは「西漢書刊誤」「東漢書刊誤」が、また「宋祁曰」として宋儒の議論が附刻され、各巻末に「右宋文景公用諸本参考凡所是正並附古注之下」等と記されている。正史には従来、このような例は見られなかったものである。

この三史の現存本はすべて墨色の鮮かな早印本であるが、きわめて少く、狩谷 斎求古楼旧蔵本（北京図書館等・松本市立図書館・天理図書館現蔵）と、上杉家旧蔵本（国立歴史民俗博物館現蔵）が三史として伝存した他に、北京大学図書館に 両漢書 が存する程度である。このうち求古楼本は原刊本であるが、上杉本は三史とも一部に改刻が施されていることがわかった。北京大学本（李盛鐸旧蔵）も改刻本のものである。

このような傾向は四部の書に広く及ぶとともに、逆に大部分の書については、主要な箇所を抜粋して他を大胆に刪節し、これに宋儒の注釈や議論を小字双行の注として挿入するものが出現した。その南宋中期刊本の存するのは、『入注附音司馬温公資治通鑑』一〇〇巻（内閣文庫）、『陸状元集百家註資治通鑑詳節』一二〇巻（静嘉堂）、『呂大著点校標抹増説備註資治通鑑』一二〇巻（北京図書館）、『省元林公集註資治通鑑詳節』存卷四三（北京大学）、『新入諸儒議論杜氏通典詳節』存一八巻（北京図書館）であり、『通典』には紹熙五年（一一九四）の刊記がある。

正史を大幅に刪略して呂祖謙の議論を附刻したという『東 先生十七史詳節』（実は十史）は、宋末刊本が『史記』と『東漢書』にあるにすぎないから憶測になるが、完存する元刊本はやはり南宋中期ごろから叢刻されたものの覆刻ではなからうか。

唐の大家の文集にはこの傾向が特に顕著で、たとえば『分門集註杜工部詩』は、宋の王洙・趙次公等の註に呂 大防・蔡興宗・魚 年の譜が附刻された中期刊本があり（『中国版刻図録』図版一九三・『四部叢刊』）、宋魏仲拳 輯注の『新刊五百家註音并昌黎先生詩集』（同図録一九四）や陳元龍集註の『詳註周美成詞片玉集』（同 一九五）も同様である。李白・柳宗元らにも標題に「増広註釈」「重校添註」などの文字を冠した元版の類が珍しく

ないが、また、ときに冠称の一部を改めながらそれを覆刻するのが一般的という出版状況があったようである。これは唐人だけでなく、北宋人の別集にも及んでいる。黄善夫の家塾之敬室も『王状元集百家注分類東坡先生詩』を出している（『中国版刻図録』図版一七九・一八〇）。

このように附註・増註本の多くは、宋末から元代、さらに明前期にかけて頻繁に覆刻されて行く。「新入」「増註」などの冠称を少しずつ変え、それが巻頭の数巻だけで巻三あたりから旧称のままになったり、全巻のうち異なる首尾題が数種もあつたり、また刊記・木記等の書肆の名が巻によつて異なっていることもあつて、いかにも場当りの出版であることを思わせる。むろん、本文もけつして優れたものではないであらう。

このような附註・増注本、あるいは刪略本の一部を、実際に調査した本を中心に、書影のあるものを加えて表示すると次のようになる。

中・後期建安刊附増註・刪略本（例）

附釈音毛詩註疏二〇卷	唐陸德明音義	劉叔剛一經堂刊	足利
附釈音春秋左伝註疏六〇卷	〃	〃（存二九卷）	北京
監本纂図重言重意互註点校尚書一三卷			嘉業堂
監本纂図重言重意互註点校毛詩二〇卷			北京 【図6】
監本纂図重言重意互註礼記二〇卷			南京
監本纂図重言重意論語二卷	魏何晏集解	劉氏天香書院刊	北京大

經進新註唐陸宣公奏議	三〇卷	宋郎暉	紹熙刊	(存卷一〇、二〇)	中央
新入諸儒議論杜氏通典詳節	三〇卷		紹熙五年刊	扨善堂 (存一八卷)	北京
新編四六必用方輿勝覽	四三・七・二〇卷		嘉熙三年序刊		書陵部
東先生音註唐鑑二四卷		宋呂祖謙		(存一、六)	中央
纂圖分門標題五臣註揚氏法言	一〇卷	宋司馬光等	劉通判宅仰高堂		北京
新刊五百家註音辨昌黎先生詩集四〇卷		宋魏仲拳			南京
新刊五百家註音辨唐柳先生文集四五卷		宋童宗說		(有欠)	北京
王狀元集百家註分類東坡先生詩二五卷		宋王十朋	黃善夫之敬室		北京
王狀元集百家註分類東坡先生詩二五卷		"	魏仲卿		書陵部

この種の出版の盛行の理由としては、常識的には科挙の参考書という用途が考えられるが、それにしても粗雑な本で、科挙に通用するのかと疑念を抱かざるをえない。

(五) 中・後期官刻本

すでに南宋中期という版本上の時期の区分を建刊本について用いているが、版刻の状況、版式、字様、刻工などの諸々の面で、これは官刻本にも当てはまる。

この期にも杭州圏にはすぐれた刻工が多数いて、主に国子監関係の仕事に携っていたようである。

前期を紹興・乾道、淳熙中、すなわち高宗・孝宗の代としたから、世代が替って、そのうちの初期の北宋覆刻期の刻工はほぼ姿を消し、前期の後半以降からの新顔が現れる。中期としては、紹熙（一一九〇）・慶元・嘉泰・開禧・嘉定（一一二四）を考えるのが妥当で、避諱欠筆が「惇・敦」等（光宗）、「弘・郭・廓」等（寧宗）に及ぶものである。「④・慎」（孝宗）までに止まる本とは、一見して明らかに相違がある。

この時期に新雕本は多くなく、『中国版刻図録』にも 越刊八行本注疏 の続きの『春秋左伝注疏』（慶元六年・一二〇〇 紹興府刊 図版七九・八〇）と、『渭南文集』（嘉定一三年・一二二〇 陸子 刊 図版三七「游」字欠筆本）、および『東觀餘論』（図版九三・四）が収載される程度である。しかし、いずれも解説に刻工名の一部が列挙され、「南宋中葉杭州地区良工」とされている。その字様は優雅でやや細目、左右に均整がとれているが、前期のものより筆勢が弱く、おとなしく纏っている。

紹定年間からは後期と見做したいところであるが、その二年（一二二九）平江府刊の『吳郡志』五〇卷（台北中央圖書館蔵 一六冊）は、原刻刻工がまさに「南宋中葉杭州地区良工」たちであり、避諱も「廓」字に至り、版式・字様も中期刊本の典型とみえる。北京図書館の同じ平江府刊の『營造法式』（古逸叢書三編）もこれに近い。

かれらはそれより、実に多くの国子監刊本の補修を行っている。南宋初期以来の江浙地区の官刻本で、その版木が臨安の国子監に集められていたことを物語るものである。その実例として『中国版刻図録』に刻工名の列挙されるものが九部¹³におよび、「南宋中葉杭州地区補版刻工」と称されている。その他にも両淮江東転運使刊三史や、いわゆる眉山七史をはじめ、現存本で数十に及ぶ監本の補刻葉にかれらの名がみえる。

南宋中期刊本、あるいは同期修葉の特徴は、上述の字様のほかに版心に顕著であつて、白口、単魚尾、多くは上象鼻に字数を刻し、その百の単位を・の点で示す。これら監本は、注に掲げた九本のように元代にも補刻され（通修）、南宋前期（初期を含む）の原刊、その中期修、そして元修と少くとも三期に刻されているが（南宋初期刊本には同前期の修葉があり、また元代に二期の修が行われている場合もあるが、ここでは省略する）、その判別は一見して可能である。

理宗（一二二五～）以後、宋の滅亡（一二七九）までが後期となる。この時期、宋は引続いて金と抗争を繰返し、次いで直接にモンゴルの脅威にさらされて莫大な戦費を要し、相変らずの政争に明けくれて、国力は衰退するばかりであつた。

そのためかこの期も官刻本はごく少いが、『咸淳臨安志』【図4】のように最末期（咸淳一二六五～七四）になつて編纂、刊行された地理書であるが、一〇〇巻の巨冊で（静嘉堂蔵本 有欠・抄配 四八冊）、匡郭も大きく（二六・五×一八・三厘）、一〇行二〇字の文字も堂々としている。避諱も末画を欠筆するのではなく、「廟諱」「御諱」のほか、太祖、太宗、英宗、欽宗、高宗、寧宗、理宗等の諡号を用いて「犯某宗諱」のように小字双行の注に代え、かつそれが多分に厳格であるなど、時代を思わせぬ佳本である。『咸淳臨安志』に先んじる『乾道臨安志』と『淳祐臨安志』が一五巻と五二巻であり、しかもそれぞれ三巻と六巻しか現存しないから、『咸淳志』の完本は内容的にも価値が高い。

官刻本に準じるものとして、宝祐五年（一二五七）刊の『通鑑記事本末』四二巻も同様の大型本で、文字はさ

らに太く濶大、宗室の趙氏の刊本とて宋諱の欠画もかなり忠実である。この本の版木は元の西湖書院を経て明の南京国子監に伝えられて補修、印行されたために、残存本がかなり多い。

その他に、福州で『国朝諸臣奏議』が刊刻されたなどの例がいくつかある。元軍の南下が鄂州（武漢）あるいはさらに西方から行われたために、臨安や沿海の地方は、淳祐年間までは比較的余裕があったかと思われる。

（六） 後期坊刻本

臨安書棚本

首都臨安城中の御河にかかる棚橋の長い一帯を南北中の棚街といい、その棚北大街に多くの書坊が建ち並んでいたといわれるが、そこで出版された書棚本である。（三）の前期坊刻本のところで述べたように、臨安の書肆では紹興中から『文選』や『抱朴子』が刊行されたことが知られ、中期刊本にも、嘉定一三年（一二二〇）序臨安府太廟前尹家書籍鋪刊の『歴代名医蒙求』二卷（台北 故宮博物院蔵）がある。同じ尹家書籍鋪の『搜神秘覽』三卷（天理図書館蔵）や『続幽怪録』四卷（北京図書館蔵）も、九行一八字の行格が一致するうえに字様もよく似、前後しての刊本と思われる。その後棚北大街睦親坊陳氏の刊本が現れ、臨安書棚本とは狭義にはこれを指すことになるが、葉德輝が『書林清話』卷二に「南宋臨安陳氏刻書之一」、「同二」、「宋陳起父子刻書之不同」の三章を設けて、詳しく考証していることは周知の通りである。そこに陳氏刊本が二〇部ほど名列挙されるが、長澤規矩也氏はその他の書目書誌から採録して、これを四五部に増補している¹⁴。

陳氏刊本には、「臨安府陳道人書籍鋪刊行」、「臨安府棚北睦親坊（南）陳解元書籍鋪刊行」、「臨安府棚北大睦親

坊南陳宅書籍鋪印」等の刊記が刻されるが、その現存本は表示した通り、一六部ほどで、それに陳氏の刊記を模した影宋抄本が一部ある。

陳宅書籍鋪刊有刊記本

	刊記略号	行格	所蔵	書影			
高常待集	一〇卷	唐高適撰	L	一〇行一八字	二冊	大東急	
常建詩集	二卷	唐常建撰	H	(以下全)	一冊	台北故宮 ⁽¹⁵⁾	図積一七四・五
周賀詩集	一卷	唐周賀撰	I		一冊	北京	版刻四八・九 図積一七九
王建詩集	一〇卷	唐王建撰	U	(配清抄本)	一冊	北京	版刻四七【図7】
丁卯集	二卷	唐許渾撰			一冊	上海	図積一八一
朱慶餘詩集	一卷	唐朱慶餘撰	M		一冊	北京	版刻五〇・一 図積一八一
李羣玉詩集	三卷後集五卷	唐李羣玉撰	A R		二冊	研究院	
甲乙集	一〇卷	唐羅隱撰	C		四冊	北京	
唐女郎魚玄機詩	一卷	唐魚玄機撰	I		一冊	北京	版刻五二・三 図積一七二
碧雲集	三卷	唐李中撰	I		二冊	研究院	図積一八五 四部叢刊
李丞相詩集	二卷	南唐李建勳撰	N		一冊	北京	版刻五四・五 図積一七六・七

唐李推官披沙集 六卷

唐李咸用撰

G

二冊

研究院

唐僧弘秀集 一〇卷

宋李 編

P

一冊

中央⁽¹⁶⁾

中央圖錄三四七
圖積一九〇

南宋羣賢小集 存五八種九五卷

宋陳起等編

P B C D E F J
Q R S T V W

六〇冊

中央

中央圖錄三五—

畫經 一〇卷

宋鄭樵撰

O

一一行二〇字

二冊

遼寧

古逸叢書三編
圖積一九一—二

寶退錄 一一卷

宋趙与时

L

一〇行一八字

一冊

北京

圖積一八四

所藏者略号

大東急

大東急記念文庫

故宮

故宮博物院(台北)

研究院

中央研究院歷史語言研究所(台北)

北京

中国国家圖書館(北京)

中央

国家圖書館(台北)

遼寧

遼寧省圖書館

陳宅書籍鋪刊記略号

A 臨安府棚前睦親坊南陳宅書籍鋪刊行

B 臨安府棚北大街睦親坊南陳宅書籍鋪刊行

C 臨安府棚北大街睦親坊南陳宅書籍鋪印行

D 臨安府棚北大街陳宅書籍鋪刊行

E 臨安府棚北大街陳宅書籍鋪刊

- F 臨安府棚北大街陳宅書籍鋪刊印
- G 臨安府棚北大街陳宅書籍鋪印
- H 臨安府棚北大街睦親坊南陳宅刊印
- I 臨安府棚北睦親坊南陳宅書籍鋪印
- J 臨安府睦親坊南棚前北陳宅書籍鋪印
- K 臨安府棚前北睦親坊南陳宅經籍鋪印
- L 臨安府睦親坊南陳宅經籍鋪印
- M 臨安府睦親坊陳宅經籍鋪印
- N 臨安府洪橋子南河西岸陳宅書籍鋪印
- O 臨安府陳道人書籍鋪刊行
- P 臨安府棚北大街睦親坊南陳解元宅書籍鋪刊行
- Q 臨安府棚北大街睦親坊南陳解元書籍鋪刊行
- R 臨安府棚北大街睦親坊南陳解元宅書籍鋪印
- S 臨安府棚北大街睦親坊南陳解元書籍鋪印
- T 臨安府棚北大街陳解元書籍鋪印行
- U 臨安府棚北睦親坊巷口陳解元鋪印行
- V 臨安府大街棚北睦親坊南陳解元書籍鋪刊行

表を一見してわかるように、大半が唐人の別集で、すべて左右双边、白口、行格は一〇行一八字と共通し、細目の字様もおおよそ似ていて、南宋後期の様式を見せる。例外は、刊記に陳解元の名がでてくる唐宋の総集と、子部の雑家と芸術家に属する四本である。そして陳宅の刊記を欠くが、『中国版刻図録』に「観字体・刀法、疑亦宋末柵本」のようにいわれるものが五、書影等によってそれと同類と考えられる本が管見の限りで静嘉堂文庫に三、宮内庁書陵部に一、台北の中央図書館に一あるが、その中に総集二、詞一、子部雑・芸術家類四が含まれる。そしてその多くが陳氏の陳思ら宋人の撰書であり、子部の書は行格が異つて一一行二〇字である。また影宋鈔本で陳宅書籍鋪の刊記を持つのも、陳起編の『宋詩秘本十一家』（台北 故宮博物院蔵）である。『書林清話』は、陳起・陳思父子が陳道人・陳解元であるとし、これには異論もあるが、「陳道人書籍刊行」の刊記は、諸書目に著録されて長澤目録にも七部が収められるが、現存本にはこの刊記が見られない。

〔陳宅書籍鋪〕刊無刊記本		行格	所蔵	書影	
杜審言詩集	一卷	唐杜審言撰	一〇行一八字	一冊	北京 古逸叢書三編
張司業集	三卷	唐張籍撰（存卷中下）	〃	一冊	中央 図釈一七八
唐求詩集	一卷	唐唐求撰	〃	二冊	北京 版刻五八
浣花集	一〇卷	唐韋莊撰	〃	二冊	静嘉堂

河岳英靈集	二卷	唐殷撰	"	一冊	北京
東山詞	二卷(存卷上)	宋賀鑄撰	"	一冊	北京 版刻六〇・六一
書苑菁華	二〇卷	宋陳思編	一行二〇字	六冊	北京 版刻五七
書小史	一〇卷	宋陳思撰	"	二冊	静嘉堂
図画見聞志	六卷	宋郭若虚撰	"		
	(卷一〜三配元抄本)		(小字双行)	二冊	北京 版刻五六
游宦紀聞	一〇卷	宋張世南撰	"		書陵部

『唐僧弘秀集』に宝祐六年(一二五八)の刊序があり、劉克莊『後村居士集』所収の「贈陳起詩」等によつて、陳起父子が淳祐末宝祐初のころ(一二五〇年前後)に活躍していたといふ⁽¹⁷⁾から、陳氏刊の書棚本は南宋後期に次々に刊刻されたものである。このように、陳宅刊本だけで無刊記本を含め二五も現存するのは異例のこととで⁽¹⁸⁾、宋朝の国力の衰えた時期にも、臨安の街ではまだ活発な商業活動が行われていたことを示すものであろう。また、これだけの数が伝存してきたのには、なにか特殊な事情があつたかとも思われる。

臨安の書棚では、前期坊刻本のところで猫兒橋河東岸開棧紙馬鋪鍾家と中瓦南街東開印輸經史書鋪とに触れたが、その後も清河坊北街西面東の趙宅書籍鋪、太廟前の尹家書籍鋪、中瓦子の張家、衆安橋南街東の賈官人宅、錢塘門裏車橋南大街の郭宅紙鋪の名が刊記に現れ、中期以降、いずれも主に子部の医・雑・小説・釈家類等の諸書を刊行している⁽¹⁹⁾。

以上の臨安書棚本は、いずれもそれぞれの別集の最古の刊本であることが多く、傅增湘が夙に『王建詩集』について、「此書余嘗校過、甚佳」といつているように（『藏園羣書經眼録』卷一二）、校勘もかなり行われているようであるが、墨釘の箇所が目につくことがやや気にかかる。

(七) 蜀刊本

蜀の地では唐代から印刷が発達し、東川節度使馮宿の上奏や『柳家訓』のような資料も残されていたが、宋代に入ってもいち早く『開寶藏』五〇〇〇余卷、版木にして一三万枚余を刻した。北宋版として日本に残る『重広会史』（尊経閣文庫蔵）と『火珠林』（紹聖新添周易神曆）（真福寺蔵）は、その可能性がどの程度であるか確信はもてないが、字様としては蜀刊本にもっとも似ているようにみえる。

その字様というのがいわゆる龍爪本で、とりわけ大字の場合に、文字通りの独特の鋭い字様を示す。その典型として、南宋初期刊と推定される広都費氏進修堂刊本がしばしば挙げられるが、この本は現存せず、その面目は同前期に鄂州鶴山書院が覆刻した本を通じて窺うばかりである（静嘉堂文庫・中央図書館蔵）。

それより代表的なものは、『相台家塾刊正九經三伝沿革例』に著録される、南宋前期刊『周礼』（静嘉堂蔵）、『礼記』（北京図書館蔵）、『春秋経伝集解』（上海図書館蔵）等の八行一六字本に、龍爪が強く展開している。蜀大字本と称される所以である。

蜀刊本のもう一つの特徴は、臨安の書棚本と同様に、唐人の文集が叢刻されたことである。その一部は一九二二年の続古逸叢書に、また一九七〇年代末に上海古籍出版社から綫装で影印されていたが、一九九四年、同社が

北京図書館本を主とし、上海図書館本等を加えて、『宋蜀刊本唐人集叢刊』二三種四八冊を洋装で刊行して、その全貌を明らかにした。北宋末南宋初刊（「北宋或南北宋之際刻」と称する）一一行二〇字本が三種、南宋中期刊一二行二一字本が一八種、南宋中期刊一〇行一八字の大字本が二種ある。

蜀刊本唐人別集 (上海古籍出版社刊 一九九四年)

北宋末南宋初刊 一一行二〇字 駱賓王文集 一〇卷(抄配) 唐駱賓王撰

李太白文集 三〇卷(抄配有欠) 唐李白撰

王摩詰文集 一〇卷 唐王维撰

南宋中期刊 一二行二一字 孟浩然詩集 三卷 唐孟浩然撰

孟東野文集 一〇卷(有欠) 唐孟郊撰

劉文房文集 一〇卷(有欠) 唐劉長卿撰

劉夢得文集 三〇卷(有欠) 唐劉禹錫撰

陸宣公文集 二二卷(有欠) 唐陸贄撰

新刊權載之文集 五〇卷(有欠) 唐權德輿撰

新刊元微之文集 六〇卷(有欠) 唐元 撰

張文昌文集 五卷(有欠) 唐張籍撰

張承吉文集 一〇卷 唐張祐撰

【図8】

姚少監詩集 一〇卷(有欠)

唐姚合撰

皇甫持正文集

六卷

唐皇甫湜撰

李長吉文集

四卷

唐李賀撰

許用晦文集

二卷

唐許渾撰(總録・拾遺二卷)

孫可之文集

一〇卷

唐孫樵撰

司空表聖文集

一〇卷

唐司空圖撰

杜荀鶴文集

三卷

唐杜荀鶴撰

鄭守愚文集

三卷

唐鄭谷撰

昌黎先生文集

四〇卷外集一〇卷(抄配)

唐韓愈撰

南宋中期刊 一〇行一八字

新刊經進詳註昌黎先生文集四〇卷外集一〇卷遺文三卷志三卷(抄配)

唐韓愈撰 宋文 註 王儔補註

新刊増広百家詳補註唐柳先生文四五卷(抄配)

唐柳宗玄撰

官刻本に個人の別集は少く、臨安の書棚とともにこれらの出版を民間が受持ったことは当然と思われる。ただし、建安でも科挙に無関係の作品は出版の対象とならなかったのか、李杜韓柳、それに宋の蘇軾・黃庭堅・朱熹の附註・増注本の他にはごく稀なようである。

(1) 神田喜一郎「中国における印刷術の起源について」、『日本学士院紀要』三四卷二号 一九七六年、『続東洋学説林』、『神田喜一郎全集』第二卷(京都 同朋舎 一九八三年)所収。高燕秀訳「有関中国印刷術的起源」上・下 『故宮文物月刊』六卷三・四期 一九八八年。

氏がこの説を発表されて四半世紀余、その間に二度も単行本に収載され、中国語訳が出て、中国ではなおこれが顧られなかった。私も一九九一年に北京大学中国文学系古典文献專業學術講座(碩士課程)においてこのことを強調し、その講義録である『以正史为中心的宋元版本研究』(北京 北京大学出版社 一九九三年)の序文に明記したが、やはり反応はなかった。

神田氏は主に『華嚴五經章』を引用し、『華嚴經探玄記』にも同種の記事があることを指摘されたのであるが、一九九八年に至って、潘吉星氏が『華嚴經探玄記』を引用しつつ、ほとんど同じ主旨の説を主張している。潘吉星『中国科学技术史 造紙與印刷卷』第二編第九章第二節一「唐代前期的印刷」(北京 科学出版社 一九九八年)頁三四五。

(2) 尾崎康『正史宋元版の研究』第一章第一節「北宋初期における四部の書の開版」(東京 汲古書院 一九八九年)頁三了八。

(3) 宿白「北宋 梁雕版印刷考略」、『考古学研究』(一) 北京大学考古学系 一九八九『唐宋时期的雕版印刷』北京 文物出版社 一九九九年所収。

(4) 尾崎康「宋版鑑定法」、『古籍鑑定與維護研習會專集』 台北 古籍鑑定與維護研習會 一九八五年。

同 「宋版鑑別法」(『ヒブリア』 第八五号 一九八五年)。

(5) 長澤規矩也・尾崎康編『北宋版通典』八卷 別卷(東京 汲古書院 一九八〇〜八一年)。

(6) 張玉春『史記』 版本研究(北京 商務印書館 二〇〇一年) 第四章。

(7) 笠沙雅章『中国古版経について 宋代単刻本仏典と明清蔵経』、『奈良県所在中国古版経調査報告書』

奈良 奈良県教育委員会 二〇〇一年 頁一〜二五) に基く。

(8) 尾崎康 前掲『宋版鑑定法』頁六四。

(9) 影印本(北京 古籍文学出版社 一九五五年)がある。

(10) 尾崎康 前掲『正史宋元版の研究』頁五〇三・五〇六・五五〇。

(11) 長澤規矩也 「越刊八行本注疏考」(『書誌学論考』 東京 一九三七年 『長澤規矩也著作集』 第一卷

東京汲古書院 一九八二所収)。

(12) 長澤規矩也 「正徳十行本注疏非宋本考」(『書誌学論考』 東京 一九三七年 『長澤規矩也著作集』

第一卷所収)。

(13) 經典釈文 宋刻宋元通修本 杭州

説文解字 宋刻宋元通修本 杭州

国語解 宋刻宋元通修本 杭州

揚子法言注 宋刻宋元通修本 杭州

冲虚至徳眞経注 宋刻宋元通修本 杭州

図二四

図二六・七

図三一

図三二

図三三

- (新)唐書 宋紹興刻宋元通修本 吳興 圖六六
- 周易注疏 宋兩浙東路茶塩司刻宋元通修本 紹興 圖六八
- 周礼疏 宋兩浙東路茶塩司刻宋元通修本 紹興 圖七〇
- 後漢書注 宋江南東路轉運司刻宋元通修本 南京 圖一〇八
- (14) 長澤規矩也「宋朝私刻本考」上・下(『書誌学』一・三・五一九三三年、『長澤規矩也著作集』第三卷所収)。
- (15) 北京図書館蔵二卷一冊は同版だが、刊記を欠く。
- (16) 北京大学図書館蔵存八卷(卷一〜八)は同版で、刊記を欠く。(『北京大学善本書録』頁六七)
- (17) 吳啓寿「南宋臨安陳氏書籍鋪考略」(『図書館研究与工作』一九八二七、『歴代刻書概況(中国印刷史料選輯)』所収、北京印刷工業出版社一九九一年)。
- (18) 瞿冕良編著『中国古籍版刻辞典』(齊魯書社一九九九年)「芸居樓」の項には、陳起の刊本が八一、陳思の続芸の刊がその編の『江湖小集』、『六十家名賢小集』等に収められる文集も含めて百数十も列挙される。
- (19) 長澤 前掲論文。

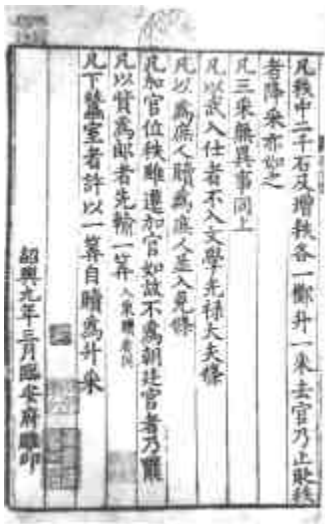
(附記)

本稿は『故宮學術季刊』二〇卷四期(台北 国立故宮博物院 二〇〇三年夏季)に掲載された「宋代雕版印刷的發展」(吳辟雍訳)の日本語原文である。もと、二〇〇一年二月 故宮博物院で開催された「宋元善本圖書學術検討會」で発表するために用意されたが、時間の制約で発表はごく一部に止まったので、更めて増補して全文を同誌に寄せたものである。本誌に転載するについては、同誌の編集委員会の同意を得た。

「序 唐五代の刊刻」「一 北宋代の刊刻」は、文部科学省研究費特定領域研究(A)「東アジア出版文化の研究」(磯部彰代表)の第二回研究発表大会(二〇〇一年一月)における記念講演「唐宋の刊刻」の内容を要約したものの、「二 南宋版」は「宋元版の展開」上・下(『漢文教育』一六・一七 一九九三年)を基にしたものである。

次の二頁に主な書影を【図1~8】として掲げる。本文中にも該当するところにこの記号で示してある。【図

1】は『北宋版通典』第一巻から、【図2~8】はすべて『中国版刻図録』(一九六一年再版本 北京 文物出版社)の日本版(京都 朋友書店 一九八三年)から採った。



【圖2】漢官儀
宋紹興9年臨安府刊



【圖1】通典〔北宋〕刊



【圖4】咸淳臨安志〔宋咸淳〕刊



【圖3】武經龜鑑
宋隆興2年序刊



【圖 6】監本纂圖重言重意互注毛詩〔南宋中期〕刊



【圖 5】後漢書〔南宋前期建安劉叔剛〕刊



【圖 8】孟東野文集〔南宋中期蜀〕刊



【圖 7】王建詩集〔南宋後期〕臨安府陳解元宅刊